

伊呂波萬年抄
全

ホ 2
657



門木加2
蒲 657
卷

以呂波為年子取

密教所以流傳在聖起發光位者機所以

契證緣功修以呂波夫以呂波也又義我活

套佛祖心肝故吐十二部教之此網吞八

萬法門之廣目任心牛子劫跋自分定顯

密之道益越世出之生實是以風性按乘

卷之六



其賤用而多於夕聲響震旦宋元傳而老
言窮學之者定招福于九天之高榜之徒
立失利于一己之也孰辨之差別於此賢
惡之幾決於茲加梅統可決又五子逆冰銷
一觀此義西重露為月氏雪山投身成道
日域了言六詔興去塵界沐其德累劫讓

其功利生之術吁偉哉。但神畫易學必
童心誦如我難入者宿者然。豈先德老釋
古賢作鈔摩約依經之至學。漸覺和釋之
極大然經釋蕩與此凡情者短。而一照親注
鈔博辯。當庸童頑拙。而能通。故以倭字
贊倭字。擲名於萬年。廿摘鈔解撰鈔。事

功於不易代只媿海深蠶細了大蠶不以
伏僭越以增悞悞云爾昔二

寶曆辛巳夏六月 大雲一瓦書于

武州本曾根大悲山普門密寺



いろは萬年艸卷之上

一部總名

凡本文の初め文字を以て一部乃題に
名あつ家くより倭漢の通例れいを學まな詩經書經論
語孟子等及び本ほん題だい乃神書の篇目へん亦もと
見みえ知しんぬぬ。今又本文四十七字の
中なかり初はつのいろは乃三字さんなりの三さん名な
中なかりいろはは四十七字とハは稱なづけり然
志しこいろはとりの名なのこ一部い部ぶ初はつ初はつ解げ

と教ふまゝに。字義といひ。得益といひ。
母亦四十七字。此總稱あり。又喉は十七
字。乃者林くものまにまゝに。十二新教
八萬四千乃法門の惣體あり。其義を明
んとまゝなる。淺略の源秘との二乃了簡
有り。東川淺略の字義を明さば。和名小
母といふも。何いろはは。訓者。其
と。いろはは。能く一切の文字乃音と訓
とを出生して。每量學意乃法門を彰出

が如く。母ハ能く男子女子を出生して
相續し。絶さず。志むれば。ゆへあり。次
に深秘の得益を明ハ。拵一切乃文字言
語ハ。喉より出て。今のい舌を動し。今の
唇ハ。觸る文を作す。今の物は。あり。大
乃。喉と舌と唇と。此三ツハ。胎藏界の佛
喉。金剛部舌。蓮花部唇の三部。此曼荼羅
の。今の題乃。佛部中央。舌。東
は。唇。西方。の三字なる。又金剛部
蓮花部

るは高正中卷上

の曼荼羅マンダラ配はいは胎藏界タイザウカイ乃すなはち東方の
 金剛部コンゴブより。金剛界コンゴウカイの北方ホクホウ代羯磨ダイカクモ部ブを
 用もちひ。胎藏界タイザウカイ乃すなはち蓮花部レンカブより。金剛界コンゴウカイの南
 方の寶部ホウブをもち用もちひ。五部ゴブは曼荼羅マンダラと成なる。
 果ミ五部ゴブ金三部コン胎タイ金コン胎タイ乃すなはち不
 同どうふ。一いつ實じつふハ金胎コンタイ兩部リウブ不二フタヒツの法門ホフモン
 なる。余あれハいろはハ三さん字じハ。あ教きやう不二フタヒツ
 乃すなはち大曼荼羅ダイマンダラハ。四曼シマン
 の性相ショウショウ十界ジュカイ
地。餓。畜。修。人。の。種。の。依。正。一。つ。と。
天。聲。緣。菩。佛。

いろはハ三さん字じハ。あ教きやう不二フタヒツ
 乃すなはち大曼荼羅ダイマンダラハ。四曼シマン
 の性相ショウショウ十界ジュカイ
地。餓。畜。修。人。の。種。の。依。正。一。つ。と。
天。聲。緣。菩。佛。

作者異説

今此いろはは四十七字ハ吾高祖弘法大
 師乃佛製作ヒツなり。是故こゝハ日本紀ニ。應神
 天皇の時。漢言カンゴン日東ニッポンハ漸シヅカ来キる。倭字ヤマトハ
 弘法大師ニ。和起ワキるといへり。又兼良トモヨシの

纂疏小。四十七字ハ。天地自然の聲あり。彼漢字を假し和字と爲し者ハ。弘法大師をいひ。又古紀小。弘法大師伊勢太神宮の告ふ依る涅槃経乃曰向の文殊秘をいるはを造といへ梨。然る古來傳教大師此作といひ。又聖徳太子の作といひ。或ハ石淵寺乃権操。延暦寺は最澄高野山の空海。おたり唱和し作るといひ。又いるはにほへどらりぬる

をこの十二字ハ。元興寺乃護命僧正の他あり。わかよたれつねならむホの三十五字ハ。弘法大師續あるといへども皆手習きなり

大師略傳

夫高祖大師ハ。讃岐の國多度乃郡屏風浦の人あり。父ハ田公佐伯氏。母ハ阿刀氏。初め父母夢ふ。天竺乃聖人來る懷み入玉と見て与し。胎内物育が如く

懐娠十二ヶ月少くして人王第四十九代
光仁天皇乃寶龜五年甲寅六月十五日
小御誕生一少兒此る託胎の不思議
り依る小字を貴物と稱せり。佛年終
案の比々掌。毎夜爰に諸佛と共八葉
乃蓮花に乗せ見給へり。余も一帯小
泥土を以て佛像を作り朝夕禮拝供養
一少兒其出抱び給ひ一時是持國增長
廣目毘沙門の四天王寶蓋を覆翳して

衛從玉つ里。法齡纔六十七歳に在り
時十方三世の諸佛に誓願して曰く我
若一行末佛法を弘め衆生を導るは物
なるは命を續しめ給へ。又は儼然す
爲りし少兒。命は失はせ給へ。此の言
嶽より。深き谷に佛身を投あしり。佛
一少兒。二度と也に天人有つて飛來り
衣を以て承救ふ。乾侯佛身聊も恙無
あさび。今後汝乃國りまら。捨刀が嶽と

録せり。亦年十二めして。外舅鮑散大夫
阿刀の大足小能く。文書を習りせ給ふ。
斯て。師年十五ふして。舅氏も伴ひて。兼
洛り出で直講の味酒乃降成に就る。詩
書を傳等乃經書を學び給へり。然て是を
志し佛經小在りて終る。遂に石瀨寺
の勤操僧正に逢ふ。虚空藏求聞指乃
法受あひて。阿波の玉大龍が嶽上
了修し給ひし。大なる寶細飛素川を

壇乃上小留まり。其寶細今も傳はりて。
第一の寶物なり。又土佐此國室戸の嶽
に在りて修し給ひし。明星來臨氣
降りて。大師乃海に入給ふ。夫を心
地忽に開く。諸法の性相廓然とて了
悟し給ふ。此節毎夜毒龍惡鬼の類異
美形乃物集り。行法を妨んば世しゆ。
大師亦口を祭唾吐玉一つ。其唾散る海
を無邊の明星と成りて。大光明を放る。

一ノノ書生州卷一
一ノノ書生州卷一
一ノノ書生州卷一

其德不伏。魔障の物永く除り。其明
星海中。み沈る石小著。こくに明星石と
る。金色の光有り。継ぎ人王第五十代桓
武天皇乃。延暦十年辛未。大師御年十
八。あし。儒佛道三教乃旨を論辯して。
三教指歸といふ書三卷作。里給。自ら
無空と名き。あし。同。く十二年癸酉。在
年二十。あし。和泉乃國。槇尾寺。あし。下向
在。勤操僧正を師と。し。師誓をね

詔。沙弥の十戒七十二乃威儀を受。其
名を如空と稱す。又改め。て教海と稱せ
る。御年二十二。あし。東大寺乃戒壇に
入。具足戒を受。由。佛名。如空海と改め
給。一。然。し。佛前。小誓。あし。曰く。我れ
佛法乃要法を求。ま。ご。も。三乘。五宗。十部
部經ハ。あし。あし。疑。あし。唯。あし。くハ。正法を
示。し。給。し。と。時。り。あし。あし。人。有。て。告。曰。く
摩訶毘盧遮那經といふあり。是汝の求

高野山 卷一

其所ありと。大師夢覺之。其經を尋求す。誰を尋ねしものあり。大師之づから思召す。小摩訶梵語。此ハ大と云ふ。毘盧遮那も又梵語。其れ日の別名也。余バ即ち摩訶毘盧遮那經といふハ。正しく大日經なるを。抑天照太神ハ。天神七代乃末伊弉諾伊弉冊の尊日乃神を生む。佛名ハ大日靈貴と號す。此の子光明有る。普く天地四方を照し給ふ。

又天照大神と名く。其佛名大日如來也。同く余ハ此佛神也。新里まんと。急伊勢大神宮小奈籠。一給ひ給ふ。感應之。怨らば。大神宮告て曰く。汝が求む所ハ和州高市郡久米寺乃東塔の柱にあり。至極妙佛法なり。此れも此の衆生下根あり。甚深の佛法也。汝書し。汝著し。衆生を濟度せよ。別念て下根乃衆生を導ん。小ハ涅槃經の句也。文

あり彼文和げく麻生に示さハ高塔
小燈と澤うおろ如く忽生死の長夜を
出そ長く菩提乃覚自と詠んと大師歡
喜乃思ひ小堪玉の體と彼久弟も
至り東塔の柱を見あふ小奇ふ所あり
穿そ穴路へハ果して大日經一部七卷
納藏有り此經は昔一人王第四十四代
元正天皇に養老五年辛酉天竺の善
無畏三藏わが歸ふ來そ真言密教弘

んと路つとも時縁いあご至るはと
て中しく歸り給ひ多れが柱と穿そ此
經納て曰く此後三地乃善薩
來そ此經は開く處として記し玉へ至る
小おあそ大師始て大日經住心品に宣
説玉ふ十住心乃深意を奉とて彼經
樂經の四句れ文和釈し初そ今乃い
るは四十七字と兼て是里亦バ見ら此
るはを受學ひ其義理趣やも知者そ太

神宮の託宣に蒙り法身如來乃說法を
種^{ちゆう}嗣^し一^{いつ}なる物あり。由大師之後。入唐^{たう}渡^た
天^{てん}をり。帰朝^{きけう}以來。入定^{にやうてい}小^{せう}至^し亦^{また}種^{ちゆう}と神^{しん}
變^{へん}乃^{なる}功^{こう}德^{とく}乘^りて救^{きう}へ難^{がた}くは。今ハ略^{りやく}
ゆる

製作年代

いろはの製^{せい}化^{くわ}乃^{なる}年代を明^{めい}さる。お傳^{でん}
人^{にん}王^{わう}第^{だい}五^ご十^{じゅう}代^{だい}。桓^{げん}武^ぶ天^{てん}皇^{わう}の延^{えん}曆^{りやく}十^{じゅう}六^{ろく}年^{ねん}
丁^{てい}丑^{しう}とある。其^{その}年^{ねん}丙^{へい}子^し小^{せう}伊^い勢^{せい}太^{たい}神^{しん}

宮の告^こ小^{せう}依^いて。久^く米^{まい}寺^じに在^あり。大^{だい}日^{にち}經^{けい}
解^{かい}し。然^{しか}て真^ま言^{ごん}密^{みつ}教^{けう}乃^{なる}意^いを得^と給^{たま}ひ。其上^{そのかみ}
ふ^ふの^の製^{せい}化^{くわ}なる一^{いつ}の^の在^ありと

真跡所在

大師の御^ご真^ま筆^{ひつ}乃^{なる}いろは。出^{いっ}雲^{つん}の國^{こく}。神^{しん}門^{もん}
郡^{ぐん}北^{きた}神^{しん}門^{もん}寺^じの寶^{ほう}物^{ぶつ}なり。此^{この}寺^{てら}も古^{ふる}ハ
之^{この}宗^{しゆ}あり。大師^{だいし}北^{きた}居^い住^{ぢゆう}し給^{たま}ひし所^{ところ}あり
ども。今^{いま}乃^{なる}淨^{じやう}土^ど宗^{しゆ}ありと云^いふ也^{なり}

和釋字數

いろはの三十一

いろはの字数四十七字小綴あり其
 謂なるは非也。近くハ本朝神代の和字
 四十七字あり教小做ひ。遠くハ天竺の梵
 字も又四十七字あり教よ別り里給ふ。然
 一大師初より其意巧心之作ありあり
 ず。大權人めえ在り教信言吐き一
 ば。歸らるる法よ叶りせ給ひし。物をし
 神代和字
 神代乃和字とりあハ。本有自然の言語

一後生の學習よ其教物には非
 神國不思議乃音聲あり大成經天神本
 紀の十小云く次よ四十七言を以て太
 己貴尊小詔し告あり其靈句りい
 ひふみよいむなやこと
 人含道善命報名親子倫
 もちるらぬしきるゆい
 元因心顯煉忍君主豊位
 つわぬろをたはくめか

いろは萬年抄卷上
 十一

臣私盜勿男田畠野女ヤツコハ
 織家饒榮理宜照法守ヲネカシ
 績織家饒榮理宜照法守ウツミ
 進惡攻絶欲我刑スシメヨ
 是の如く宣ふ大己貴ハ尊天の八意れアキキナキコノセメ
 命と與小意を同ふコトシ
 代乃文字を造る此四十七字を以て通アキキナキコノセメ
 連て萬の言句を作と果はれりヨシツブ
 神代

乃和字ハ。ひふみや等の四十七字あり
 余れども神代此和字片言を造るは
 未の代みよてハ。そを造るは
 事と聖徳太子悲を給ひ依て漢字を并
 せぬ神代の書と著し。以て神代の靈
 句乃義理を。知れ易く。志先を
 一扱ちの和

漢字傳來

漢字の我朝へ来りし事ハ。人王十六代

應神天皇の十五年甲辰又百濟國乃王
阿直岐とつし者を使中して救多
乃經典ちりび小良馬二匹と貢がり其
阿直岐能く經典依讀たり應神天皇阿
直岐又阿直岐の孫ひり敷ハ汝が本國に汝
よ來賢まする博士も有るやとのまひけ
るに阿直岐答へて言く王仁漢の高帝
とつし者有り尤秀なるものありと余
時め應神天皇使と百濟使へ遣りて彼

王仁と召まきりて翌十六年乙卯の二月
王仁來朝して孝經論語を以て皇子乃
菟道稚郎子小授り爰小おいき人皆
王仁よ能く經卷を習ふといへども王
仁が讀むハ皆漢音なり本朝乃人小
通トグスル余後人王第二十七代繼體
天皇乃御宇まきり異國の經典教多讀
まねども音義通ト釋し事趣を解
事能りん佐よ二百年修り弘暦とを也

日本紀ふゆせ字

漢字轉用

深字を方小我朔よ用ひし奉ハ人王第
三十一代敏達天皇の二年癸巳乃正月
朔日用明天皇れ弟子小聖治太子生れ
給ふ。同く六年丁酉小百濟國を里法
華經おらび自餘佛經禪律佛工寺匠志
を承教へ渡し奉り聖德太子此等乃
經卷數を覽し。増く智解河開あり。能

んし。神道の廢ま事。靈跡乃徒ふる里
ける。歎給ひて。物部忌部占部木の記
録。此處所を見給へとも。神道分り
河野ゆへ。河内國れ平岡乃宮へ。小聖
の妹子といひ臣孤遣り。泡州乃泡輪
れ宮へハ。秦の川勝といひ臣を使少
る。神代乃録事と祈り求めし給給ひし
時。妹子平岡大明神へ詣り。宣命を啓白
し。まれば。神殿鳴動い。と曰く。天徹地徹

日本紀卷之十一

神代卷之十一

人徹大聖皇太子の命と畏を教ゆ事。
手親土笈を妹子に給ふ。又川勝ハ泡輪
乃大神へ至り。宣命既啓白しき達ハ明
神現き出給めて曰く天亨地亨人亨大
聖皇太子の命と畏をあらとて。手親ら
ら土筐を川勝へ給ふ。妹子川勝乃西勅
使共小神語既傳へく。土箱を太子へ持
たるに。聖德太子自ら開見あふ。神代
此記録分明あり。余まても其記録ハ隠

山太神の御作小。神代此和字乃經分
きは容易ハ解しが。爰ハ打のて聖
德太子。神代乃記録ハ隠。更ハ漢字の
音訓既轉ト用之。神代の事どもを記録
しあひ。石乃和字の記録を元ハ如く土
笈に入き。初乃あら。あ大助神へ返
納しあり。此世り當ハ。太子の御作小
て。漢字を以て記しあひ。物なき。初
今の大成經等是あり。爰を以て。大成經

の成萬年神代卷二
の二五

乃序傳よるん小曰いひく。太子漢字の和語わご小令せうの
物。一万三千字法ほひき。漢音かんおん改あら免はなす和
聲わせいととああ。依よて初はつめめて漢字も我國わがくにに
文字もじと如ごとくといいひひす

和字わじ隱おん顯けん

上かみ小出せうしゅつをを不ふのの。ひふみよいむまやこと。
もちろらねししまるゆい。つわぬぬずををた
はくぬが。うをを急いそににささりりべべててののまま。すあ
せ急いそほれれけけ。ととつつみみ四し七しち字じのの。祢代ねしろの

文字もじよりより。天照太神あまてらすかみ大己貴おほみかひの尊みこと小告つげを
ひひししとと季き始はじり。初はつめめてて。隱山おんさん大明神あたま祢代ねしろ此
和字わじ法ほひき。祢代ねしろの事ことをを記しししああひひししるる。
初はつめめてて世よにに顯あれれるる。然しかしし。餘あまりり秘ひしし
て。平岡ひらおかと泡輪うづらと此こゝ兩大明神あたまへ。土筐つちかご小
入いれままてて奉納ほうなつせせるる。四十七字しじちじ乃すなはち和字わじ爰こゝ
小こねねてて隱かくれれるる。然しかしし。小聖せうせい深ふか太子たいし。妹
子むすめと川勝かわかたとと此こゝああ大臣おほなみ執とら使しひひすす。彼かの
兩大明神ふたあたま。平岡ひらおかとと泡輪うづらとと此こゝ感得かんとくしし。又また世

て妙法驚太山初嵐霧雲掃懷とつし沛
 貴報有り。傳教是を漢語小懐あり。日
 本乃諸神と架使せし。老翁現き來る
 いとく。我朝と垂迹和光の土あり。假
 名字の風俗あり。要をりて。八雲小周
 也。傳教思るる。和光とは大
 和なり。假名字といふ。和字あり。風俗は
 日本義なり。八雲とは素盞鳴乃言の
 八雲立。稻田姫と妻室とせし。...

小。や多。八雲とつくる。出雲八重垣。はまごめ
 中つ小三十一字。此の字は和字なり。傳
 教はこれより。是乃曰く。傳教を通り
 小うかを付らね。傳教は和字なり。
 妙法驚太山。初嵐霧雲掃懷。
 と假名を付らまじ。是漢字小い。是は
 乃文字。此は假名中。此は。此時と里
 初まじ。

假名三種

...

假名といふ小總トて三種阿字平がふ
と。ま字うか。空。片かなと有り。且く通俗
みらひていへば。根元乃漢字をま字が
ふといひ。そ漢字をわけらる和字を平
がふといふ。余れハ。真れ文字ハ。ま字が
ぬやといひ。草の文字をまがふといふ。尔
似たり。片う。ま。ま字のふをば。又そ葉
葉かなといふ。いろはを以呂波とま
が。如し。片う。ハ。次下。小。明。く。如し。

片假名起

片うかハ。偏う。或ハ傍う。又ハ冠う。皆う。
鬼角真字の偏強う。平がふ。小代へ
用る。左片かなといふ。右ふ。出。見。見。べ

イ 伊 口 呂 ハ 半 二 仁 ホ 保 へ へ ト 止
チ。リ 利 又 奴 ル 流 ヲ 平 ワ 和 カ 加
ヨ 與 夕 多 レ 札 ソ 曾 ツ 川 子。ナ 奈
ラ 良 ム 牟 ウ 宇 井。ノ 乃 才 於 ク 久

ヤ也。未ケ介フ不コ己工江テ天
ア阿サ薩キキ工弓メ女三。シ之
正慧ヒ比モモセ世ス須

此中。チ子三井の四字ハま全つたく其訓よを用
ふり。慧乃字を本朝あいみくへ多おく慧小
作つくりしゆへ。其その中なかをそのゆゆて正ただとせり。キ
キき勅しつち。平へいががふふののきき乃の字じとと畧りやくししるる物
也。此この行ゆふふは。真ま書かれれ文字もじに。假かり名なをを附つ
録りやくす。尤な後ごとと語ごし。おおしししし。作つく者ものらら何なにま

乃世。誰人たれといいふふ事こともも無なし。余あれれはは乃の世よ。
後衣さごころもとといいふふ歌うた書かに。片かたううふふをを以もてて哥うたを
書かくくとといいふふ詞ことばをを思おもふふ。古ふるくく梨なし用もちひ
素するる事こと久くししもも物ものあり。吉備きび大臣おお乃の作つくと
いいふふ説せつもも者ものままりり。甚ことと位い用もちしし。
吉備きび大臣おおハ。寶龜たからかめ六年ろくにん乙卯おつと尔なり此この世よをを終お
へり。弘法こうぼう大師おおハ。其その一ひと年とし前まへ。寶龜たからかめ五年ごにん甲
寅うし小渟おと誕生たうじんしし終おふふ。終おれれハ。いいままふふよよが
ふふれれいいるるはは出い来きふふ終おふふ。片かたううふふ乃のい

るはの有る。履記謂れか。

弘通異國

いろはは四十七字也。本邦のこ是を言ふ。法
寺教ふ。何々。後異國といへども又其貴
之事と称せり。陶南村中。つゝ者乃著
く。教書史會要といふ書。亦曰く。宋の第
二代真宗皇帝乃景德三年。日本國の
僧寂照來まり。仲孫の語。あは通せざる
とも。善く筆札と作せり。然るに。日本

國小ハ。日本國の文字多り。文字乃母
僅又四十七字。多きども。能く通して是
を識まは。一切乃文字。れ音と訓とを
係。依て求めて。一通り寫し得る。傳を受
ふ。奉に依り。理ふ。或る連子。合て。文字。紙
の。す。假令ハ。天をうらと。いひ。地を
ちや。いひ。山をやま。と。いひ。水をみつと
いひ。日とひ。や。ら。ひ。月をつと。や。いひ。筆
紙。ふ。で。と。いひ。墨と。や。み。と。いひ。紙をか

みとつひ。硯研すど重とりあが如く。大意此の如しと云へ里。是處に羅山林先
生も阿部豊後守の求小意ト云。序文を
他水多曰く。唯廣く我朝小意多乃とみ
所ら凡遠く文字の名を中華傳に播
ちり也。卷めらまきと云

受學淺淡

いろはと受業に法と深々の二つあり。只
の十七字乃文字のそを學ひ淺し。四

七字れ義理を學ハ深し。今此いろは四
十七字ハ聯合せれば。百千万億無量の
文字乃音と訓とになりて。一切の所用
小潤足とれを以て。幼稚れ男女とも
受學處り。今まども幼稚のも乃小ハ文
字をハ教安く。義理をば曉し程し。余の
之あり。次。幼稚乃時片。簡きを好く。そ
煩り。きを嫌ふを以て。四十七字乃いろ
はを。右行せよ分て。一切れ七文字。小

極め。文字の名乃之紙初くしむ。是大師
の大慈大悲れやむるふた。幼稚の男女
とて。其の安んずるため乃方便
あり。後生の私めせし物あり。此
大師乃佛言筆にいろは。此下に
あまき
す。体足庵。拙年書くハ物乃辨もあま
ハ。考く義理と学成貴し。此時ハ四
十七字を。而句に分て。いろはにはほへど
らりぬるを。おがよたれづつぬならむ。

うおの朽くやまけふこわて。あまき
めみどるひもせす。と教給へり。此は
後のいろはを受学ぶもの。先いろは乃
文字体初くバ。次ハ其義理と解る庵
其義理を解り得るハ。我が心江澄を庵
し。我が心を澄しゆてハ。身の行を正し
んぬ。身の内西くこれハ。祇乃道も身
小備り。佛れ位もあまき。又他あら
い。是れいろは。言祖大師。世に
出給ひし

本懐ほんがいゆゑ。いろはを御製作ごたくあり給ひ
大意たいいあり給
ヲホハ子

いろは萬年艸卷上畢

いろは萬年艸卷之中

略出依經

涅槃經ねはん乃四句の文を和やけ釋とく。いろは
四十七字と作さしあふ事。妻くくハ上小唱あうた
か如ごとく依よる經文。取意とくいありて爰こゝ小唱あうたん。
涅槃經會疏卷十三聖行品しょうぎやうひんに云く爾時そのとき
小帝釋たいていしやく天てん自ら其身みを變へんじく。羅刹らしやく人ひとを
る鬼おにの形かたちと作かつて雪山童子せつぜんどうじれ前まへにある。
其聲こゑ清きよく雅みやびしく。過去こくわの佛ほとけ乃すなはち説とふありし。

いろは萬年艸卷中

所の諸行無常。是生滅法。やりの二句八
字。宣ふ雪山童子。此半偈を聞て。心中
小歡喜し。四方を顧るに人あり。唯ぞ羅
刹の^{EDOUJENDEN}存在。童子乃曰く。誰う此文説
や。羅刹が曰く。我まなり。童子の曰く。善
哉。大士。何まの處ふ。おいあ得る。我も
刹が曰く。汝此義を我まに問ふ。應る
す。我ま食せざる事日多し。爰も小食を
求るに得る事能り。童子の曰く。大士

若し。我が爲めに此偈説す。竟る。我
ま終るま。汝が弟子と。羅刹
が曰く。我ま飢渴の苦。小逼り。我小
説る能り。童子乃曰く。汝が食する物
何成ぞや。羅刹が曰く。我が食すは。肉
と。唯ぞ人の體なる肉あり。飲物と。唯
人乃。我ま血なり。然ま。世小人
多し。唯も皆福徳有り。兼も。徳天乃
爲め。守護せらる。友。我ま。食

法華經卷中

一巻一頁五州巻中
二

よる事能は童子の曰く。汝我が為め小
今の半偈を説は。我き偈を聞竟る。才を
以て供養せ給へ。羅刹が曰く。汝果して
能く身捨捨る我が舎とぬらば。承れ汝
の為め小説給へ。童子心中小歡喜して。
即ち身小著る鹿の鹿乃皮の衣に脱て
おて法座とあり。羅刹小白して言く。和
上願くハ。此座小坐して一坐。坐せし免
已て其前小合掌長跪して曰く。唯々願

くハ和上我が為め小。其半偈を説ふ。
羅刹即ち。生滅滅已。寂滅為樂と演り。
童子の曰く。少時乃留待せ給へ。承れ此
曰く乃文を。末世永生小遺して後身
紙投給へ。若ハ石。若ハ壁。若ハ樹。若ハ
道小。此偈を書写して。即ち高き木の上
りて文を投ふ。未だ落る地り至ぶ前
に。羅刹忽ち帝釋天と復て。空中小たお
て承救ひ。亦地小安置す。尔時小帝釋天

一巻一頁五州巻中
二

及び諸の天人。雪山童子乃足を頂禮し
て。讚しして曰く。善哉善哉。真小是菩薩
也。此因縁成り十二劫を越し。彌勒
此前さ小在り。阿耨多羅三藐三菩提を
成就せしと云。此四句の文和あて。書
を作里。下根の衆生を濟度せしと。太
神宮の御告小仰せ。いろはを綴む一
標釋住心
寔小いろはを。四句乃文和譯釋ありと

録も。大日經の住心品小宣説あり。十箇
れ住心を極意として御製作あり。さ
れば。いろは乃一部多。十住心論乃最略
の書あり。大日如來や高祖大師との
心中秘寶也。陳ひる物あり
第一異生羝羊心 異生とハ。凡夫の事
なり。一切經音義小云く。梵語に必栗託
佉那。此小は異生といふ。凡夫中いふ
義を以て譯ししと。物まは凡夫と異

いろは萬年抄卷中

生といハ一物二名あり。今ハ一と云。其生ハ
ことなるの生と訓を其の業
乃業を作り。其の報は感也。其の苦も
更け。其れ愚趣小生なり。其生といふ
里●羝羊といハ。おひつとと訓す。羝羊
の牡より鹿あり。畜生乃中。別を鹿
欲と食物とに耽る極下劣なり。其
生又賢ふ。是即ち凡夫の善悪乃因果を
知りて。一切に悪行を作し。激水の善

根も修むべ。唯ぞ慾と食との二想
事。羝羊小似たりといふ意なり。此任心
法地獄。餓鬼畜生の二惡趣乃業因とい
第二愚童持齋心。愚童と云。愚痴乃童
蒙なり。●持齋といハ。齋を持て訓す也。此
齋といふハ。八齋ホの佛に戒ふハ。波す。
外道の。天へ生じんと邪小意あり。一日
不食乃齋修む。此任心人
乘あり。依る三綱。父子君
臣。夫婦。五常。仁。義。禮。
智。信。乃

一は萬年抄卷中
五

いなり萬葉集卷中
三

道と學で不因果の不有るを孔子
過たはるる必ず改めるの心より即ち孔子

儒教 老子道の教をる

第三嬰童無良心 此住心ハ天乘なり

嬰童とハ。嬰兒に思童なり釋名に云く人

の初に生はるは嬰兒なりとり嬰兒は人の

胸に乃ちあらるも初生れる嬰兒を胸のあら小懐く

接し乳養を給ふ小兒を嬰兒とりて也。
●無畏ハおろるる事を一と割す是天

上乃果報なり人界をちり勝て令長く樂む

法暫く無畏とりて●以上の三心を世

間に三箇れ住心とりて人天乘なり地人をこり

修をるる友を用ひ四句の文に申ふハ諸行

無常の句に小常を和釋乃方にはるハいふ

はにほんどちりぬるをの句に小常を也

第四唯蘊無我心 是ハ聲聞乘なり唯

蘊とハ唯ハ韻會に獨但也と註しる偏

小の色ハ眼耳鼻舌身の六根也受ハ根

いなり萬葉集卷中
三

六塵和合一思想意識。六塵と和合行意識。
 て六受と和合思想六根の識。六塵乃五蘊
 諸り多にあり識と不知なるべ。蘊ハ積
 の法あり今ハ略しと蘊とつみ。蘊ハ積
 集る乃受之人の才ハ。此五蘊の法合
 て。人と如く抽之。此宗ハ人とは空なる物な
 神どもも。五蘊の法體ハ。常住有物と討
 左に唯蘊なり。●無我とハ。人我を空
 物とつみ。左小無我なり。此住心と人
 法二執此才の人執を断ぎ違ひるも法

執とは除す。云世更小有法の體ハ恒
 小なりと。左宗意なり
 第五拔業因種心 是ハ縁覺乘あり●
 抜ハ。ぬくと訓す。抜る捨る乃受あり
 業ハ。悪業煩惱なり●因ハ十二因縁を
 里●種ハ。種子と訓す。無明煩惱の種子
 一切乃悪業ハ。皆此無明と種とて生
 する所小種なり。今更ば。抜業因
 縁とハ。悪業煩惱株杓小事十二因縁

とん。生ずる所の種と謂ふ。無明を拔く
捨るの意あり。拔業因種心といふなり
以上乃二箇れ。惟心ハ。小乗教なり。小
乗ハ。自身の事乃と思ふ。他の事を思
ひ。大乘れ己を措て。人を先ず救ふハ
大小相違せざる物なり梨

第六他縁大乘心 是ハ法相宗あり。此
宗ハ三界唯一心乃を證を得。且法界
の衆生と同躰と見て。大悲心を起すが

故小菩薩乗と名く。●他縁をハ。他は法
界乃。衆生をいふ。縁ハ因縁とて。大悲
心發起をいふ。是大乗れ。初ある者。大
乗心といふなり

第七覺心不生心 是は三論宗なり。●
覺心といハ。自心の本源を覺るなり。●
不生といハ。不生。不滅。不常。不斷。不一。不異。
不來。不去。といふハ。不正道の一つあり。身
一乃不生と云ふ。其餘の七不。法華經に

此宗ハ。正ハ不正道を観し。其心を
覺る。念に覺心不生心とり。なり。此
六七の二心ハ。四箇の大乗の中。小る。毛
權大乘あり。以上乃四五六七の四箇
の任心ハ。四句乃文少。ハ。是生滅法の
句に當る。和釋の方。てハ。わかよたれ
ろつぬ。ならむ。ふ。なる

第八如實一道心 是ハ天台宗なり。法
華經に依る。四教藏通別圓五時華嚴阿含方
等般若法華

の法門を建立し。一心三諦中。假。乃觀
想を空一と云。●如實一道とハ。如ハ契
也。實ハ実相一実也。一道ハ一實申道也。
謂意ハ。實相一実の申道。尔如。凡。聖。迷
悟。深。淨。苦。樂。ホ。皆一味。平ホの。宗。意。と。ぞ
第九極無自性心 是ハ華嚴宗あり
極とハ。上の第八乃任心の極位をいふ。
●無自性とハ。自性ハ。大日經に疏。自
性ハ本性也。といへり。自性性と云ふ

一は萬年抄卷中
九

ハ此位心也。一切の法皆在心乃實際小
入と覺て下も流生の度と極まなく上
諸佛乃求む極を以て万は休息し
て。極と謂り。尔時小密佛の警覺を象
て。初後位小進が終と極無自性と名
く。此八九の二心を。一乘とて。大乘
乃申めも。實大乘なり。曰。此文の中小
ハ。生滅滅已の句に當り。和叔乃方めく
き。うわのたぐやまけふこにて。小當る

なる事 以上の九箇乃位心也。顯教とい
ひ。此次如第十の位心を密教とす
第十秘密莊嚴心 是ハ真言宗あり
秘密とハ秘奧深密とて。大日如來の心
中乃德體カクヒテ フクフカク エンカナリなるまバ佛と佛を乃と。和叔
る。此秘密とす。即ち身密。語密。意密の
三秘密なり。●莊嚴とハ。具足圓滿乃を
申す。恒沙の佛德。塵數の三密ホ。具足圓
滿也。兩部乃曼荼羅也。秘密莊嚴と稱

法華經卷第十

せり。此住心ハ四句乃文此中小ハ寂滅
爲樂の句よ南里和釋の方うてハ。あさ
きゆめみど急ひもせず。に事るあり
以上十住心なり。世間。出世。大。小。顯密。淺
深。差別し。喜。救。無量あり。を能も。此十
箇乃住心小。攝し。是れ。法物之。是の如
こ十箇の住心と極意し。いろはを
綴り。あらるる

偈文訓義

いろはの義理を味ん小ハ。先に此四句
乃文此義を味ひ得れバ。いろはの義も
通し安し。其第一乃句ハ。
諸行無常 諸ハり法くと訓す。転え
限も無く。教多なる物を法としし。
即ち。色あり聲あり形あり。一つしし
諸の字り漏る物無。●行ハ。打つらるひ
少く訓す。其も小作。行ふ所の業あり。一
切危生ハ。色聲。香味。觸法。とり。六の塵ハ

とソノ。生ぐて暫く停在哉。住相とソノ。
住しと在間小。始終も唯も回し此物も
非也。小の物ハ大なる物。短き物ハ長
く成り。若し物ハ老を催し。盛なる物ハ
衰成招ふ。彼是福り往く小野此小町が
歌を起す法無相といふ。遷り変りく
る。終も其形を失ふ法滅相といふ。是を
生住異滅乃のおといふあり。●法といふ
ハ。佛道小ハ法をいふ。儒道にも物といふ。

名ハ其の義と同一。但儒道ハ物事形
相乃上と号す。呼ぶ物といふ。佛道ハ萬
像性徳法本と号す。法中ハ物事
と法といふ。凡て次第法の辞意を
らぬを理あり。即ちまの物事は孝の
法。父中成ると慈利の法。臣とて忠
義乃法。君と成ると仁乃法。夫婦は際小
と別の法。兄ハ弟法。願う弟ハ兄と仰ぐ
法。初朋友と相互心。此実と考す法。近く

法は萬事の中 卷中 四十四

ハ手お持ちら定まりけり。耳ハ聞て後鼻ハ
嗅く。役目遠しハ瓢て纏。ハノ那お電の
周子て毛。播木て登る例無し。是を儒の
を物理といひ。佛道少くハ法性と稱す。
是此法ハ。始るハ終有り。生阿連ハ滅無
事能く。獨佛道のみ。生死無常法法は
小非す。儒も造生化死を以て是乃極
致也。道教は虚無法は多教の大本
と云。孔子乃上小在。水の流小無常

孤觀也。莊子ハ妻を喪ふ。缶を叩て歌
へ。是之教也。始有ハ終有ると云。是
を知らずと智者と。此理小疎。予は愚者
とす。終るに。吾も頑小僻め。人々生滅
を聞。無常と云ハ。身乃垢。多可地も。生
見也。是病と抱て。醫茶と矯ふが如く。生
滅の世り生れて。無常の理を厭は。寧ろ
生を福ハ能く。心小と。ハ多ぬが不思
後。其亦の下根乃當め。了也。太神宮也

高祖大師へ託し。四句の文を和げし
先づつと。●第三乃句ハ

生滅滅已 此句れ生滅ハ。正しく上の

句乃生滅哉承来まきども。心緒深し。第二

の句れ生滅ら。生死を生滅せしむ其意

浅く狭し。此句乃生滅ハ。一切有為の諸

法。森羅萬像。皆共に生滅有為を説ふし

ゆゆの如く。深く廣く。●滅已とハ。生も

死も滅も無しと。諸法の空實れ相と有る

神ば。生滅の根本なる所。及無明も自ら
消失し。煩惱即菩提と顯る。如法に
き。煩惱も無く。其の如く。恒に無常位の樂
果を得る位なり。●第四の句ハ

寂滅為樂 寂滅とハ。寂靜乃其滅

心斷滅の義と。涅槃は障る所の發段

變易乃二種。れ生死及び。煩惱所起乃二

種の障を除滅し。まると寂滅なり。

又寂滅を涅槃の義と。梵語ハは涅槃と

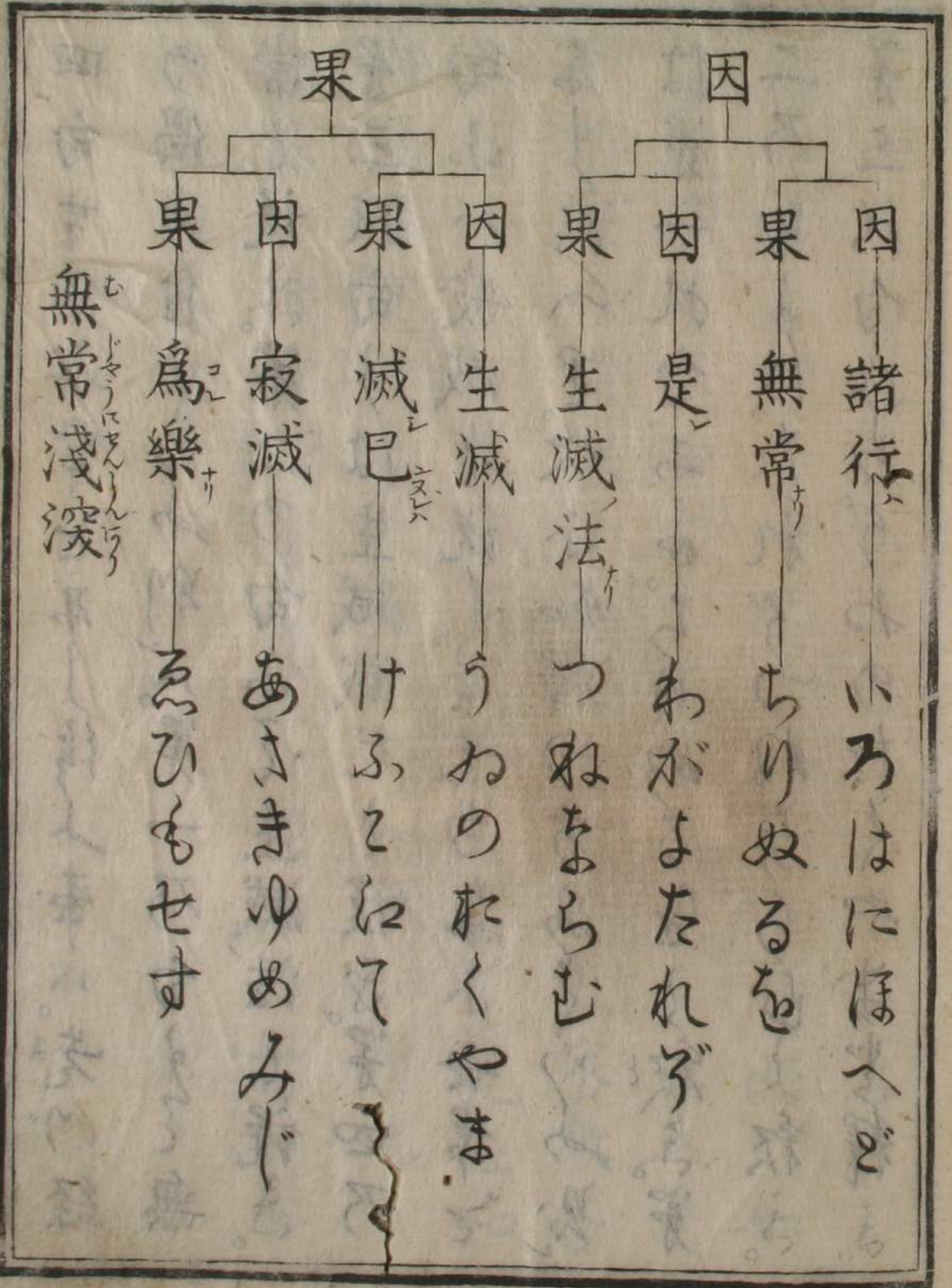
高祖大師の御書

いひ。此小ハ圓寂といふ。急疾ハ。徳と
 備らざれば事なれハ圓之障りて除
 ぶれりなれハ寂之。法藏乃心經の疏
 出さる。今此文は。涅槃の
 除るる。寂滅を奉る。一切の功徳系滿
 一とる圓寂の義とは。兼歎くも一梨の
 爲樂といハ。爲ハ是と訓す。凡と樂をいハ
 小ハ。大。小。假實乃差別なり。熱鉄地獄と
 涼風地獄と樂とい。無財餓鬼と漿水の

名代すても樂と。高生ハ水草を見て
 樂ゆ。人天ハ五欲色。聲。香。味。觸。又ハ財
 睡眠を樂と。二乘聲聞。緣覺ハ灰身滅智の
 小涅槃を樂と。是ハ咸小欲なり。佛
 乃樂ハ最上至極乃樂とて。惡業煩惱ハ
 眠の夢無く。無明妄想の酒乃苦無
 界平等ハ大安樂なり。此佛の樂と。寂滅
 爲樂とは説く。一孝。四句合く云へ
 は。一切流生乃動作所の依りハ。皆是生

一は萬年十卷中
 一は

滅無常の法あり。此亦乃生滅之如悉く
 滅し已終ハ。涅槃寂滅の位あり。事。生。実
 無上の大樂なり。高祖大師此四
 句乃文の功德を贊しその玉の如く。若有
 男女一聞此偈能滅罪業早得善
 果と最有利多き
 文配因果
 經釋此四句の文を因果乃二法小配セ
 る。因果小各因果有り。圖し之曰く



一は萬年
 二は
 三は

四句其小無常と云ふは後小奉ハ。先ハ經
の偈め付る所の別ハ。第一乃句も無
常と説ふ。第二の句も生滅法と説ふ。
第三の句も生滅滅已と説ふ。第四乃
句も寂滅と説く。是乃句も無常と
云ふは經ハ。次小和釋の方めく所の見
は第一の句も無常。ちりぬるをと釈す。第
二乃句もはたれづつねならむと釈す。
第三の句もはわのたぐやまを釋す。

第四の句もはあさきゆめ及び。云ひと
釋す。其も無常を示す乃句も。此の如
く經釋せし。四句も無常法也と云ふは
ハ。所被の機根よ世間出世顯教密教各
不同の類が在り。能被乃聖教も。梵經和
釋淺深寛狭の差別有り。譬ハ所治の
病源も淺深輕重有るハ。能治の藥針も
大小難易有る如し。

漢和會合

乃ハ鳥群中卷中

二九

漢字十七字を以ていろはは四十七字小
附よりハ。興教大師乃いろはは祕釋二部
あり共小漢字を出し終ふ。然れハ。興教
大師の御手小作也。物なり例せば。總
山大神乃。和字代以て祓代の奉と記し
あひしを。聖修太子。漢字と以て更記し
繪ひし教が如し

●和字

いろはにほへどありぬるを

●漢字

色匂散

わがよたれがうぬならむ
うわのれくやまけふこにて
あさきゆめや、急ひもせず

我世誰常
有為奥山今越
淺夢不醉

本文訓釋

抑所釋の經文四句あまは。能釋乃和字
も亦四句あり●其第一の句ハ
いろはにほへどちりぬるを 先の字
を明さバ。いろは色乃字之。韻會よ云
く色ハ顔氣フェイスあり。人小徒セツひワ後ハ

色ハ人の儀節ニ又ハ女小美色有り。男
タシキニサハ
 子是儀惚ぶを經傳乃文通トク女人を
セイレシケンシヤノカキモ
 色と謂トモぞ然ハシテいろと訓トク
 ハ。采色あり。どりと略トク。いろと
 あり色聲香味。觸法乃六塵也。中の第一
 小ハ。今ハ色乃一ツと云ク。其條を合藏
 多物より安惠菩薩の五蘊論マク。彌
 勒菩薩乃瑜伽論卷三小。各三種の色と
 説ク。一ハ顯色トク。顯ウリ見ユル

夏乃色即ち青黃赤白光影明暗雲塵霧
 空ホ也。二ハ形色トク。形有る所の色
 即ち長短方圓麤細高下正不正なり。三
ナカシニカシケタニロシ
 小ハ表色トク。表ニシテ見ユル色也。即ち行住
ナカシニカシケタニロシ
 坐臥取捨屈伸等此三種乃色也。眼耳鼻
ナカシニカシケタニロシ
 舌身意の六識乃中小眼識の見ユル所
 也。此ハ實ハ心識小屬ス。眼ハ
 赤ハ妍ハ媠ハ。見ユル分アリ。心ハ
 又白記中ハ。彼ト云。此ガ表トク

此ハ萬年ノ書也

赤之中も。夫ら李是也。分を立く己が
情小悪ふ色ハ割くして愛し己が欲に
遠ふ色ハ烈くして嫌ひ事に依りて
後り其心ハ何見分た作能ある心識
をば分別識と名く是を王小變へく心
王と名け眼耳鼻舌身乃五識をバ臣下
小況ふ其信下の中に眼識ハ法乃色を
見て白黒好醜を心王へ奏達し王ハ聽
受て即ち善悪邪正の岐を分別して明

白小變断あるべし。變断明なるは善
法無悪を捨く邪を離て正法行ふ此
位を有為の善と名く若し心王乃變以
昏弱なるは色欲れ高ふ小迷ふる若悪
邪正乃岐を濫し正法好むして邪に
陷り心王守護の回解治くべし天高
し中軽も踏る地厚しと誰も踏す孰も
ある此位は有為の悪と名く此心王を
安くうみ當へ志せんが定めは佛ハ教

一萬五千卷中

二二二

代設あり情欲を執去る。正色不變漸せ
し先給ふ。瑜伽論の第二十四に云く女
色乃殊勝水。幼少盛年少くも美しく
なる形色。或ハ餘乃見影所の衆れ色。公
能く種々の法悪不善乃想滅。一は
し。是れ如き色の類。阿く少。凡乃色
是。諸。凡乃。大凡。色ハ儒佛道
乃之。亦共に痛く悪めども。本報の歌道
小の。意と。一。色ハ風雅

あり。凡種ハ仁あり。仁無。慍乃心あり。
慍隱の心は人乃人。其。徳あり。且。亦の
是あり。何以。事あり。徒。然。小云く。万に
いみづく。中も。色好。ざらん。男ハ。玉乃。厄
れ。底。凡。地。を。凡。色。さ。里。と。く。云く。
是ら。戯。ま。す。方。小ハ。あ。く。で。女に。容易
す。思。ま。ん。し。我。阿。く。何。ぼ。く。凡。色。は
さ。あ。凡。と。ぞ。取。捨。心。王。能く。臣。下。乃。眼。識
が。取。上。く。凡。色。を。分。別。す。裁。断。深。く。さ

まは。善悪おのぼり。唯白なり。是を心
鏡といふ。儒をふは此位を明德と名け。
神道ふは此所を神明と稱す。三種の神
寶れ中に。八咫の鏡を第一の宝。依く
もひんなり。其他乃聲香味觸と耳鼻舌
身乃は下乃後と。心王一取作小教
事之全く此道理なれ。○にほ一と字は、
少字ひも句の字あり。にほひと訓は、
奉ハ。本小生なり。き張略し。小はよと

しなり。さ張ども。句乃字ハ。字書小香
乃訓を。但ど編之齊之少之均之古
へ韻の字と通ト用也。詔きり。其後韻の
字は略し。中韻小作り。又畧し。句よ作
る。さし張は。如銀昔と架。方は香氣の訓
小用事ハ。香氣の薰風外へ字あり。を
音小韻者。に機一をる物。倭字大略
に。香教乃訓。小用。非なり。中ハ有ま
ども。一人の手。小天下。中。度。ひ。難。今

にほへどとつよめ花と人々の聲をい
 るんと争ふ白をいふ然ども人乃此を不
 浄と體とせし物を大論にハ五種ハ不
 浄哉説云一り。一ハは穢子不浄煩惱業
 淨乃肉身二ハ住所不浄十月胎内ハ
 位三ハ片自躰不浄自身と外
 相不浄九孔流出五ハハ究竟不浄死
 壞了真くあり也。是人乃身ハ不浄臭穢
 たる穢ども香油身ハ塗里名香衣ハ薰
 一

一暫く不浄と隠す代心王能く勸諭セ
 る移ハ。香の端分小迷一里。風俗文選ハ
 云く能く遊女乃こぬ〜此移り香也。
 糠袋の白ひりりをもおもむる。賤傾城乃
 少好ひハ。那肉鳥の掃り香なるん。追込
 辻君の類ひハ。白ひりり定るん。●
 ちりぬるをといふハ。散乃字ナリ。是を
 ちるや訓歩移事ハ。散と爲也。おと略し
 て。ラリルレ口の二三通少く。ルとリと

ありし。ちりといふぬるハ詞の助あり。
 興教大師乃釋小云く。ちりぬるをとは。
 無常よ義と立ど乃むへり。●此句の中
 小いろはとははの字とわ乃音ぬ讀みハ。
 アカハタナハニヤラワれ十字ハ。皆末
 小アの韻あり。是初のア字を母とて。
 出生しきる字の家が有なり。其中小は
 中わとは。共小唇内とる字なる有
 はとわの音ぬ讀み。然れどもわをは

の音小讀み。然るハわ乃字なる音
 に限る自在あり。はの字ハ清濁自在
 此濁有る有る。わ小通し多用有るなり。
 支とてえはの字上ぬるハわ中讀み。
 彼は此はといふが如く。下小有時ハわ
 中讀みあり。是と反切の約ていふ。わハ
 上小有わ下母乃反ハは横の行ハ本
 て又字わ下母乃反ハは横の行ハ本
 あり。是と横母とわハとハ讀み。若し
 下乃例といふ。わハとハ讀み。若し
 ばの字下小有ハわハとハ讀み。若し

内小紘チヨコと読ば。共トモ子舌シタの末音マツネ乃字ノジある
か。あみへをハ江ニ小通チヨトウト用ヨウたある。其餘カキノコエは
皆上ミのは乃字ノジれ。みまが如ニ。●此
第一乃句ノク。若ニく謂意イハハ。世間ヨミの草木クサキは
花も美ウツクく。廉ウツクく盛ウツクまは。色も白も備モウて。寔マコト
小愛チヨイす。庭ニの品シカも種タネも。不射ウツク小嵐チヨイ乃吹ウツク
まきハ。色も白も散チヨク失ウツクて。愛チヨイぢら。新アタ境サカイ
毛モ老オシ。詠カウハ。つ。交カウ情チヨウも。無ムらん。全マツ其ソノ如ニく。
人も好ウツクく。嚴ウツクて。美ウツクく。登ウツクる。花ハナ色イロ香カウに富トクく。

花乃姿ハナノサマも。無常ムジョウの風カゼが。下シタをシび誘サヒは。艶ウツクも
態カタも衰ウツク削ウツクて。籠カウま。新アタ庭ニ縁サカイも。新アタへ。眠イムむ
庭ニの念ネンも。絶ツクん。是コトが物モノの始ハジメ有アル種タネハ。終オハシ有アル
る。世ヨミれ。習ナラフひ。そ。示シ。あ。ひ。物モノなり。兼ケン
好ウツクも。花ハナを。さ。う。り。小チヨ。月ツキハ。く。海ウミあり。た。の
こ。え。る。物モノハ。咲サキぬ。つ。と。新アタ乃ノ梢サカ。ら。ま。志シ
目メま。く。新アタ庭ニよ。ん。ど。物モノ。見ミ所ところ多オホクく。種タネ。
よ。海ウミの。事コトも。始ハジメ終オハシ。し。む。つ。つ。れ。男オトコ
女メウメ乃ノ情チヨウも。偏ヒラカ小チヨを。ひ。え。る。と。ハ。つ。つ。あ。物モノ。

ハ。逢あぐ止や少すくううつつ思しひひ。化くわるる勢せうと
かかあらら。長ちやうきき夜やを獨ひとり唯ただし。遠とほく雲うん井いハ
思しひ遣やるる。淺あさ茅ちぢが岩いわに音おとししと思しふふ。色しきくくのむむとハいいとああと。ああんんといいと體たい
ををり

いろは萬年艸卷之中 畢

いろは萬年艸卷之下

○第二乃句ハ興おこ大おほ唯ただし。わがよたれうつねならむ。わがとハ
我わがの字なあり。わがと訓とはるる事ことハ我わがハ分ぶん
たの字な。わを略りやくし。わがとつね。子こハ親おやよ
里り分ぶんああつねねなり即すなはち存ぞん身しんあり。此こ我わが
ハ。色しき。受う想じやう。行ぎやう。識しき乃五蘊ごうん和合わがくわして假かりめ我わが
を解とく。實じつふは五蘊ごうん各別かくべつの法ほふ體たいなり。我わがハ
實我じつがとつねをいい。譬たとへハ五指ごしゆを握にぎままん。

いろは萬年艸卷下

トれ二之通ふるたをつやふし。ナニ又
子ノの三四通めぬをねにあり。つ
ねやういふ。●ならむとい。此意ハ不^つ断^ねを
る物う。常でハ無いと。初と^つ及^つして無常
よ新事^{しんじ}に教^{けう}をひし物あり。興^{きやう}後^ご大^{だい}師^し此
句^くに釋^{しやく}し。我^{わが}世^よ誰^{たれ}ぞ常^{つね}なりむとハ。是
生^{じやう}滅^{めつ}の法^{ぽう}あり。四^し相^{さう}遷^{せん}變^{べん}し。自^じ性^{じやう}に
任^{にん}せぬ。是^しを無^む常^{じやう}之^の名^なくととのむ。一^{いつ}と
此^こ一句^{いつくわ}つね^なよ^らた^れず^じ十一^{じゅういち}字^じハ。經^{きやう}文^{ぶん}の

是生滅法乃句に釋しむひし。わがよ
ら是の字ふ通る。たれづつねならむハ
生滅法ぬ通る。●此句にオム^む乃字と
跳^とがふに^に呼^よぶハ。ウ。ム。の三字を共^{とも}小
梵^{ぼん}字^じに空^{くう}点^{てん}を^を通^と用^うら^るる^{あり}。其^{その}中^{ちゆう}
小^{せう}ウ^うと^と喉^{のど}内^{ない}。ニ^に舌^{ぜつ}内^{ない}。ム^むと^と唇^{しん}内^{ない}乃^の聲^{こゑ}ふ
る^{あり}。梵^{ぼん}書^{しよ}小^{せう}月^{げつ}に^に時^{とき}ハ。喉^{のど}内^{ない}の^の梵^{ぼん}字^じ ^{アカ}サ^サタ
ナ^ナハ^ハマ^マヤ^ヤ ^サメ^メハ。喉^{のど}内^{ない}乃^のウ^ウの^の跳^とが^が用^うひ^ひ舌^{ぜつ}
内^{ない}に^に梵^{ぼん}字^じ ^イキ^キ ^リ井^いの^の ^ムハ。舌^{ぜつ}内^{ない}乃^の ^ムハ。舌^{ぜつ}内^{ない}乃^の

この文は高麗三山集下

の跳を用ひ層内乃梵字ムウクムツヌフ
ふら層内のム乃跳を用ふるなり。本邦小
るハ舌内のン也層内乃ムと通用する
左むの字然以て跳うあに一とく

○第三乃白ハ

うめのれくやまけふてはて うめは
有爲れ字あり。華嚴疏鈔卷十六下ふ云
く。作為ら所なるも以て有爲と名く。有
者此是無常なりと。●れくを奥の字也。

於く也訓は教奉ハ。奥を昧なるらるる
略しむおくとつよ ●やまは山乃字之
やま也訓は教奉ハ。山ハ止る梨むとま
と。一三ムメモの初之通ふくやまとつよ。
止ハ常に止て動ぶれは義あり。奥は天
師の釋り。根本すめと生。任。異。藏の四相
也。此五つを有爲乃真山とくめ。と乃むへ
字。今まこと有爲れ世界の越程ふと。真山
り。今まこと有爲れ世界の越程ふと。真山

けふと別も有るハ。今日も此日あり。の
を略し。カキクケ。コレ四五通あり。コ
レけとねし。パ。フ。へホの二。通あり。
ひとふや作し。けふあり。●こにて
は。越乃字あり。こはと訓も有る事ハ。越
超過あり。下畧し。こはと訓も有る事ハ。言意ハ。
昨日世間之箇の位心及び向てハ。生死
無明の極難不通れ。悪を小踐迷ふて。有
為無常の苦ありせし。今日一乘を

吾陰難焉道也。凌越て。無為常位の樂岸
小至る義あり。●此句ハ。八九十ハ三
箇の位心ふ。當らふ事。有為れ奥山と越
る。第一之劫を越るに。次ハ。終小。真言
行者ハ。初心より表徳の觀ありと作し。て。
麁細極細の三妄執ハ。超る。時分乃劫
數をば。強に。結まじ。觀行未了。熟せざ
ば。多くと遮情め。涉る。在に。地前と
能寄齊也。同く第一之劫小在り。

一の又高五中

此位を大日經小復次み真言門の菩薩
 の行を修りし諸乃菩薩と宣流むへ
 の。余ふし。密家ハ有相表徳れ觀し經
 して斷ずる惑ありまを第四の微細妄
 執也名く。此第四乃微細妄執を断じて
 至極寂上の佛果を得る位也。大日經乃
 疏小。究竟一切智地十一地と釋し經へ
 里當位を此下の。あさきゆめみじると
 もせず。と結びるひし物なり。●此句に

けふこにてと。ふの字はう乃音小讀
 是。ウクスツヌフムユルウの十字ハ。初
 れウの字は母と。あ出生と。初母
 乃うは韻部帯せり。あふし。●換乃之内
 小。約。是は。共る唇内の字あるが。あに。
 〔ふ〕 〔う〕 〔ふ〕 通し。常用なる。あ。然らもふの
 字上に。時ハ。あう乃反し。ふ也。あ。自
 辨れふの音なり。若しふの字下りたる
 時也。うふの反し。うと。あ。自辨のふ

の音と措て奉元乃う此音に候。今の
 如くけふとう此如小版なり。又和
 訓乃申小うの字い如字
 此通しう用候事有り

正 二三通なり。又く乃字き如字此通

ト用候 忙 苦 猛 正 里。是ハ。カキ

クケコ乃二三通なり。是の如くいうく

きのゆ字を。同ト一字乃顔小用事ハ
 アエライウカケコカキク 喉内カキク 同此由るヨリイウ 候バ
 なり。●第四の句也

あさきゆめみぢ忽ひもせず。此一句
 十二字也。真言密乘乃表徳実相の如チ紙
 以て無明即明と照。凡身即佛身也見
 る所也。第十一地の究竟乃極果と云
 玉へ李●あさき片浅の字あり。あさき
 と別が事ハ。浅を足先あり。しを略し

てあさき中り。今も〜〜遊ふハ深記
不討しける詞に〜。有考を淡とらひ
無為誠深中り。なま〜。ゆめみどとは
ゆめみど。夢の字あり。ゆめみど何ぞ
事ハ。夢ハ夕べ不見るな程。べ不るの三
字誠略〜。マ。ムメモ乃二三通あり
みよめとね〜。ゆめ中り〜あり。ト
不乃字なり。トと訓するハ。不ハ非
里。何〜誠略〜。サ。スセワの二三通

少多。不誠不中。呼あり。ゆめみど〜。爰
ハ見れとあり。●因。不。世乃人ハ夢るよ
付〜。移〜の由あり。事と明さば。智度論
卷六。少云く。夢に五種有る。身中よ熱氣
多。少。別バ。火を見。黄。見。赤。をる。若し
冷氣多。少。別バ。水を見。白。見。若し
風氣多。少。別バ。飛。事を見。黒。見。又
見。聞。〜。事。不。付。思。惟。多。少。別バ。其見
聞。〜。事。を。見。或ハ天より。未。乃。事

高平中 卷下

事と夢其^し飽^らバ予^りる^る以^て夢^を肝^の氣^を
 小^ままは怒^りる事^を夢^に肺^乃氣^盛ふれ^ば他^ハ恐懼^ハ
 泣^し飛^揚る^る愛^心氣^盛ふれ^ば喜^笑
 恐^畏と夢^脾乃^氣盛^ふれ^ば歌^樂し又^身
 體^重し^めま^るる^ると^愛腎^の氣^盛ふ^る
 腰^脊二^小氣^るる^るを^居る^凡此^十二
 盤^ふれ^ハ至^る是^と字^はれ^ば針^を立^す
 愛^に已^ハ●^厥氣^心小^客ハ^丘山^煙火^と夢^肺
 小^客ハ^飛揚^流愛^又金^錢の^奇物^を見^ん

肝^小客^ハ山^林樹^木と^夢脾^に客^ハ丘^陵
 大^澤壤^屋風^雨依^夢腎^に客^ハ淵^み臨^水
 中^小没^居事^を愛^膀脱^み客^ハ遊^行する^事
 事^と愛^胃小^客は^飲食^を愛^大腸^客ハ
 烟^野依^夢小^腸小^客ハ^聚邑^街衢^と愛^膽
 小^客ハ^鬪訟^て自^ら事^ハ夢^陰器^也
 小^客ハ^接肉^と愛^項小^客ハ^首を^斬て
 夢^脛小^客ハ^行走^る前^を放^るる^ると^愛
 及^び深^地節^苑の中^小居^と見^ん股^肱小^客

は。禮節レ拜起キと夢胞腫ハ小客ハは。洩便ハをレ友

見る。凡此十五乃不足ニ至ル。是と補ヘば

針ヲと立所ニ小已シとレ也。△素問ニ脉要精微論

小云く。腹ニ短蟲多ク終ルバ。聚衆ヲを夢。長

蟲多クけまバ。相擊テ毀傷ヲ事ト為ルルヲ也。△

關尹子ニ小云く。仁ヲを好む者ハ。多ク松柏

桃李ハ好む者ハ。金刀兵鉄ヲをレ友。

禮ハ好む者ハ。簞簞豆ヲを夢智ヲを好む

者ハ。江湖ニ澤ニをレ友。信ハ好む者ハ。山岳

源野ヲを夢ルルヲ也。是亦乃祝ハ以テ見

於テバ。夢ト輕クも陰陽ノ氣血ノ。虛寧ニ衰ス小

依テ見ル物ヲまキは。友ヲをレ也。夢ト小ニを

屋ニくレ。陰陽ノ氣血ヲをレ勤ニ辨ス。ゆニ急ニ也。醫

士ハ好む者ハ。茶ヲをレ服ス。生命ハ保ツんハ。折レれ

る人ノ也。ソノ事乃理小暗ニ人ノ也。

夢ヲをレ妄想トふニもレんト也。凶ニ恭ニにシ。

遇ス物ヲをレ警ニむニ人ノ者ハ。或ハ濼ニ也。

控ス。或ハ滑ニ。沮メ。聽ク大病トもレ生ス。

源野ヲを夢ルルヲ也。是亦乃祝ハ以テ見

於テバ。夢ト輕クも陰陽ノ氣血ノ。虛寧ニ衰ス小

依テ見ル物ヲまキは。友ヲをレ也。夢ト小ニを

屋ニくレ。陰陽ノ氣血ヲをレ勤ニ辨ス。ゆニ急ニ也。醫

士ハ好む者ハ。茶ヲをレ服ス。生命ハ保ツんハ。折レれ

る小至れ説ひ悪夢アキキユメも覺さめて後のちお
悔つひめいは忽たちまち吝きつじ嗚なる。劉向リウキョウが説苑セツエンふ云
く妖夢ヨウムハ善政ゼンセイハ勝かちび。惡夢アクムハ善行ゼンギョウハ勝かち
ずと我われさまは國王コウクワ十夢ジュム經キョウふ云いく。不黎フレイ
先泥王ゼンニハ曾つて外道ゲダウ乃すなはち法ホウを信しんじく。佛道ブツダウ
法ホウ言ゴンばさうさうが。一夜イチヤ十種ジュシュウの惡アク友トモを見
て。占者ウラナヒモノに問とまきく。其その言ゴンふ。甚とほく不吉フキツありて。
一イチ中チュウ一イチ善事ゼンジありと占ウラナヒ一字イチジ。王大オホキ小
愛悲アイヒ心シンと。試シみに佛ブツも問とふややと始はじめて佛

小歸依コキイ乃すなはち念ネンを起おこす。往いて世尊セソウに問とひ奉ほう
れ。佛ブツの言ゴンく。王オウ恐怖コウフ事ジ勿なれ。王オウれ夢ゆめる所ところ
を。今世イマノヨ乃すなはち奉ほうふハ非あやま。當來トウライの身み之の而しかも
王オウれ夫人フじん及び及び太子タいていハ妨さまたげし中ちゆう曉あきし
ふ。王大オホキさに喜よろこび。是こゝより外道ゲダウの法ホウを
捨すてて佛道ブツダウを信しんじ。當來トウライ乃すなはち惡報アクハクをも脱のれ
る。是こゝは惡夢アクムも其報そのむくひを脱のるハ。佛法ブツポフ
其力ちからを解とけ。引ひや真言マコトノミ陀羅尼タロニを修しゆじしる
之の乃すなはち七しちの大善夢ダイゼンムに授さづかる。不空フクウ絹索ケンソク

いはは萬年十卷下

經二十八の卷小説云へ。△爰に頼も
子毛草紙乃如き書子有り。為め小語
曰く。孝經云く。身體髮膚。是皆父母
受けり。敢て毀ひ傷むるを。孝と謂べし
と云。論語云く。父母ハ唯々其病ハ憂と
云。是人乃子。これ其の憂。髮膚の種さ
へ。毀ひ傷てハ。孝小兆に。況て其身不
之めり。病を受て。醫士とて迎ふ。徒小
身命ヲ失は。孝と知らハ。謂難し。常と病

法恐き身を保て。適受難し。人乃身と受
て。文字の送り暗と。口惜し事と。少思ひ。
一日小一字法學ても。五十年の間みは
一万八千字と賞也。其一一れ文字ハ。皆
金色の佛と成る心乃中に羅列て。大光
明を放ちあるの由。尊き經小説云へ。梨
さ。其種む。人如及。神乃是ハ。勿論之。極樂
乃十萬億土も。寂光淨土も。華藏世界も。
及び法界宮殿も。此大光の少と。照し足

、ろは萬三千卷

るるるまき。此光明乃種々々々ハ。今在いろ
 は也。四十七字に。八萬四千の法門も残
 ざり。ハナリ。縦ひ汝等家小在る業ヲ續
 とて。功成り名遂る後ら。身を墨染乃
 袖の隠し。有為の奥山を越て。出た。若
 者とはいふ。先法乃文あり。一人出家
 まは。九族子孫曾孫玄孫。天に生れ
 といへり。古へ深草の不可思議元也て。
 倭漢の學小通せし人。身延山小て醫ハハ

納て。徒づつ小。此をハ傷く。其後。に。我が
 思ハハ。す。ハ。懐し。と。後。殊勝
 命を惜む。命を。興教大師の。一朝大要集小。身
 命を。惜む。命を。用心を。命の。玉ハく。
 壽乃限。未だ。変定せ。終る。一向身
 命を。棄捨。ハ。且ハ。佛法ハ。新。且
 ハ。醫療ハ。加。以て。身を。安。壽を。延
 術とせよ。是。徒小。軀乃。命。愛。心。小。非
 す。唯。佛。を。守。の。結縁。と。厚。せん。也。欲

と。今一後へ。至者種く。常由。● 忍ひもせ
す。中ハ。忍ひも。醉乃字なり。忍ひと訓す
る事ハ。醉ハ。鰕の如し。酒小酔て色赤
く脚ガ起ぬ。あり。興教大師の釋小云
く。夢トハ。妄執邪見なり。此依離るが
小涅槃と澄醉と。無明痴闇なり。此を
越るが。底に菩提を得。と乃一。字。然き
ば。初めハ。有為の妄執小依て。常無明
の酒り。酔て。眼も昏く。定下も定く。ぶ架

一。今ハ。表徳實相の智を以て。無明即
明中照し。見ぬ。我心即法界。法界即我
心。ふて。兩部不二の。大日如來なる。空を
以て興教大師ハ。後の句。あさきゆめみ
を。眞言あり。次れ。如く。胎め。あさきゆと。金
忍ひも。中。と。釋し。へ。△。余ハ。此第
四の句。と。果し。眞言なり。按小四十七
字。乃中。に。初。ア。の字。を。出。し。一。字。
夫。ア。字。ハ。惣。ト。ソ。ハ。六。大。地。水。火。
風。空。識。

あは高年十卷下
の十二

色を以て一切乃色に加ふ終ハ。行きの
色も其色と増すハ。子ハ母小能く生長
されれ其理ハ。真言行者の。及字ハ方形
也。金色小軟也。此由之△同ト
之釋小云く。復次に諸法といハば法曼
荼羅なる事也。此意也。及字ハ諸法不生
乃義の存小。西部界會の諸佛諸尊ハ三
摩地念此小ハ等及念及念顯密經論乃文義亦
皆此及字を以て出生せり。近くハ十二乃

摩多三十五乃體文合一七梵字其小及
字より生れ△大疏第十七亦一切心眞
言といハ。即ち及字を以て一切の言音
皆此及字小從て始也。此以多あり。
若し此及の聲無きは。即ち一切乃語と
終之説也。此奉る事也。當小知べし。口
を開き聲を出しハ。即ち是及の聲也。
の五つり△一字頂輪王儀軌小及字菩
提心種智乃奉源一切字母十方三世佛

ハ、乃ハ萬年甲卷下

少説給つ里。是等の意ハ。及字の外小十
方乃諸佛も無く。又及字の外小十方の
佛土も無し。けんに法華經ふけ。天乃至極
を阿迦尼吒天一切法佛と稱し。地の至
極阿鼻地獄都舎の所と説あひて。天地も及字
と離そき。又五方の佛土も及字を離そす。
東方を阿閼佛國土ホククニとつひ。南方を阿羅
怛曩三婆嚩怛羅佛國土とつひ。西方を
阿彌陀佛國土とつひ。北方を阿目佉悉

闍惡佛國土とつひ。中央ハ本より阿字
法界體性あり乃大日如來ありなり。又大日尊あり無
量壽如來。及字の四轉ありを以て。四佛。四親
近ありと給ふ。是外ちあ部法界あり唯一及字
乃と爰と以て。大日經の疏あり。小行者あり。自
心ありの申あり。小於ありて佛あり乃界會あり。具足ありを教
と以て。十方通回あり。一佛土あり也。如と
説あり。と里。取捨あり。真言神通あり。乘教ありハ。易修易
成ありの法門あり也。地ありハ。朝暮あり。不斷あり。乃呼吸ありを押

あるは萬年十卷下
六

とは何物ぞ。即ち二而不二。不二而二。乃
大日如來あり。也。觀如さへ。是は。即身
即事の佛塔。少ゆ。我有りる。是言の
深き旨。然る。志。然んが。當め。今此。是言の
此果を。唯。白。小。玉。第一。小。あ。其。の。字
法。標。し。掲。げ。あ。ひ。し。物。あり。●。以上。四。句
乃。和。釋。ハ。字。義。句。義。を。小。重。く。無。盡。の。法
門。藏。た。我。ば。凡。慮。乃。量。知。所。非。非。元。よ
り。紙。筆。を。著。し。述。る。亦。非。非。唯。須。弥

乃一塵芥を撮り。大海の一滴水を汲
物あり。●此句の中。小。ひ。乃。ま。は。の。音
小。呼。ひ。ハ。イ。キ。ニ。チ。ニ。ヒ。三。井。リ。イ。れ。十
字。ハ。根。本。の。い。字。あり。出生せし。在。皆。い
乃。韻。阿。里。々。共。小。舌。内。れ。音。あり。我。が。在。に
通。じ。く。ひ。乃。字。を。い。の。音。小。續。之。反。切。の
沙。汰。と。委。く。上。小。明。が。如。し。此。の。如。く。ひ
の。字。紙。い。小。通。じ。て。呼。ば。い。ろ。は。乃。中。に
い。の。字。ニ。ツ。み。り。依。て。歌。書。の。假。名。遣。ひ。小

いろは萬叶集
卷六
一

其端乃い。申のちのぬ奥おくれひ。乃差別しやべつあを揺ゆ
 ざる耐たのい。ふはぬ於字このを用也。魂たまの
 位ちわくらホの類なり。△又い乃字をひの
 字し。替か。う乃字のに替かを用也。
 事有り。思おも。患うま。ホ乃類之。是ハ下モ
 の類り。乃。ふとひやハ。ハ。ヒ。フ。へホの二三
 通く△。いれ字をひ乃字の。替か。うの字
 とふの字小。甚た。深ふ。辛か。
 替か。難が。さ。阿あ。り。

甘あま。此この如ごとき乃類るくの類る有る假かり
 き。く。カ。キ。ク。ケ。コ。の二三通。い。う。き。ア
 イ。ウ。エ。ヲ。乃二三通之。此二行アイウエヲハ。ア
 カ喉内のど同あるを以てお通とお之類之。若し
 是をひ小類ひさふよ延の。ハ。ヒ。フ。へホ
 の音。カ。キ。ク。ケ。コ。乃形かたちめは通とおト類る。惣
 して假名かりづ。ひ。ハ。此意を忘れたハ其
 滑なめきぬ。●因ゆ小五類ごハ。一。二。三。四。五。曰く

一ノ五ノ中ノ一ノ二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ十一ノ十二ノ十三ノ十四ノ十五ノ十六ノ十七ノ十八ノ十九ノ二十ノ二十一ノ二十二ノ二十三ノ二十四ノ二十五ノ二十六ノ二十七ノ二十八ノ二十九ノ三十ノ三十一ノ三十二ノ三十三ノ三十四ノ三十五ノ三十六ノ三十七ノ三十八ノ三十九ノ四十ノ四十一ノ四十二ノ四十三ノ四十四ノ四十五ノ四十六ノ四十七ノ四十八ノ四十九ノ五十ノ五十一ノ五十二ノ五十三ノ五十四ノ五十五ノ五十六ノ五十七ノ五十八ノ五十九ノ六十ノ六十一ノ六十二ノ六十三ノ六十四ノ六十五ノ六十六ノ六十七ノ六十八ノ六十九ノ七十ノ七十一ノ七十二ノ七十三ノ七十四ノ七十五ノ七十六ノ七十七ノ七十八ノ七十九ノ八十ノ八十一ノ八十二ノ八十三ノ八十四ノ八十五ノ八十六ノ八十七ノ八十八ノ八十九ノ九十ノ九十一ノ九十二ノ九十三ノ九十四ノ九十五ノ九十六ノ九十七ノ九十八ノ九十九ノ百ノ百一ノ百二ノ百三ノ百四ノ百五ノ百六ノ百七ノ百八ノ百九ノ百十ノ百十一ノ百十二ノ百十三ノ百十四ノ百十五ノ百十六ノ百十七ノ百十八ノ百十九ノ百二十ノ百二十一ノ百二十二ノ百二十三ノ百二十四ノ百二十五ノ百二十六ノ百二十七ノ百二十八ノ百二十九ノ百三十ノ百三十一ノ百三十二ノ百三十三ノ百三十四ノ百三十五ノ百三十六ノ百三十七ノ百三十八ノ百三十九ノ百四十ノ百四十一ノ百四十二ノ百四十三ノ百四十四ノ百四十五ノ百四十六ノ百四十七ノ百四十八ノ百四十九ノ百五十ノ百五十一ノ百五十二ノ百五十三ノ百五十四ノ百五十五ノ百五十六ノ百五十七ノ百五十八ノ百五十九ノ百六十ノ百六十一ノ百六十二ノ百六十三ノ百六十四ノ百六十五ノ百六十六ノ百六十七ノ百六十八ノ百六十九ノ百七十ノ百七十一ノ百七十二ノ百七十三ノ百七十四ノ百七十五ノ百七十六ノ百七十七ノ百七十八ノ百七十九ノ百八十ノ百八十一ノ百八十二ノ百八十三ノ百八十四ノ百八十五ノ百八十六ノ百八十七ノ百八十八ノ百八十九ノ百九十ノ百九十一ノ百九十二ノ百九十三ノ百九十四ノ百九十五ノ百九十六ノ百九十七ノ百九十八ノ百九十九ノ百十ノ百十一ノ百十二ノ百十三ノ百十四ノ百十五ノ百十六ノ百十七ノ百十八ノ百十九ノ百二十ノ百二十一ノ百二十二ノ百二十三ノ百二十四ノ百二十五ノ百二十六ノ百二十七ノ百二十八ノ百二十九ノ百三十ノ百三十一ノ百三十二ノ百三十三ノ百三十四ノ百三十五ノ百三十六ノ百三十七ノ百三十八ノ百三十九ノ百四十ノ百四十一ノ百四十二ノ百四十三ノ百四十四ノ百四十五ノ百四十六ノ百四十七ノ百四十八ノ百四十九ノ百五十ノ百五十一ノ百五十二ノ百五十三ノ百五十四ノ百五十五ノ百五十六ノ百五十七ノ百五十八ノ百五十九ノ百六十ノ百六十一ノ百六十二ノ百六十三ノ百六十四ノ百六十五ノ百六十六ノ百六十七ノ百六十八ノ百六十九ノ百七十ノ百七十一ノ百七十二ノ百七十三ノ百七十四ノ百七十五ノ百七十六ノ百七十七ノ百七十八ノ百七十九ノ百八十ノ百八十一ノ百八十二ノ百八十三ノ百八十四ノ百八十五ノ百八十六ノ百八十七ノ百八十八ノ百八十九ノ百九十ノ百九十一ノ百九十二ノ百九十三ノ百九十四ノ百九十五ノ百九十六ノ百九十七ノ百九十八ノ百九十九ノ百十

京乃字ハ。漢乃班固カ。白虎通卷、一尔云
く。京ハ天子居を謂く我。此京の字を
いるはの末小加へあふら。古来お傳ふ
傳教大師乃恩功ありと。其所徑を尋ハ
京乃字代漢音小呼めはけとい。之呼合
て京の字一字乃音と如敷。是ハ皆來祭
禮ホ。其外二字合する假名キ。皆此意之
と。ハ指南小京の字を加ナあり。又吳
音も漢時ハ。まとやとらと三字呼合テ。京

乃字一字の音中なる是ハ清明良長ホ。
其外二字合する假名ハ。其外此意と
おふ一給ひ一物あり。我ば京乃字終小
一字を種ども合せ假名の指南小を便
宜き處之。尔乃とあり。京ハ天子都
小一也。文武百官都會不あり。士農工
商の四民小もま。海陸千里代凌て。眩
仰あるが如く。三界六道小流轉セ一
切衆生も。今此いるは乃修行を修て心

王所住の。福德智慧莊嚴乃京小。到る此
義あり

數字所詮

いろは小。十二三ホの數字と加へて習ふ
事ハ。出雲國神門寺に寶物に。弘法大師
佛真筆のいろは有りて。未だ數字試出
しあふが處と。古來お傳ふ。其寫小曰く
いろはにほへと。○按ずれば。いろはの
ちりぬるをあか

よたれつつねな
らむうねのねく
やまけふこねて
あさきゆめみし
ゑひもせす
一二三四五六七
八九十百千萬億

數字を加へあふら
神代の稱字は十七
字に初小。ひふみよ
いひなやこともち
る。せりふ十之字也。
今乃一二三四五六
七八九十百千萬の。

毛當時世小用數の訓也。神代乃義と

ぬしむつとつ。是男女親子睦み
 ●七とは。馴馴たる里。或略しつを
 助字少し。事ふかつ。中々ふなる里。八と
 ら奴形事。つを略してつ。或助字ありて
 やつ。中々ふ。奴とは八重に出る子あり。
 ○九とは。事事ぬるふ里。と。とる。と。畧し
 ナニ又子ノ乃通顔ふてなとの。と。奴し
 つを助字あり。事。こここのつ。たつ。あ。た
 親子孫彦繁り。榮て。法事ぬ。還る。ぬ。

●十とは。外形を。或略し。事。中。つ。

然るに。と。と。延。呼。事。ハ。オ。オ。を。の。韻。

何。数。有。之。又。と。或。略。し。て。を。用。於。る。者。

三十。字。は。十。字。中。つ。み。が。如。し。惣。と。て。数。

ハ。九。小。極。る。有。十。ハ。較。の。外。と。云。ふ。義。に。

て。と。と。つ。ひ。又。ハ。と。と。云。ふ。之。●百とは。

衆。ふ。り。る。を。畧。し。て。も。も。と。つ。ふ。之。●千

中。は。縮。寄。なり。こ。よ。別。を。略。し。事。ち。ち。と

云。ふ。数。多。乃。負。一。所。小。縮。寄。を。略。す。云。ふ。

● 萬マンとハ寄積ヨシツキなり。もるを略して。ラリ
 ルレロの二五通少ツトて。計ケイ試シる。少ツトを略して
 よろづと。り。是又救キウの依ヨて積ツキらね
 あり。● 億オクハ是ハ字乃音ナリオンなり。億オクと云
 少ツトハ小數セウ。大數ダイの別ワカり。古コへハ十萬ジュウマンを
 億オクと云。是ハ救キウと云。秦シン始シ乃時ナリトキ改カる
 万万を億とす。是を大救ダイキウと云。今時イマトキと
 皆此大救ダイキウを用ヨウ。以上イゼンの數字ジジの中
 小コ。乃ナリ字ジ後ノチ助字スベテに去イる事コトハ。救キウと云。

義イなり。結ムスるに。すを助字スベテとせ。一イツと云。つ
 と助字スベテ小コ。去イる事コトハ。サレヌ。セリ。タ千チツ
 テト与ヨ同ト。舌内ゼツカ乃音ナリオンなる。通ツトト用
 小コ。二ニ三サン四シ五ゴ六ロク七シチ八ハチの古コ字ジハ。助字スベテ乃ナリつ。試シ
 二ニ完カン呼コり。其ソノ義イ。い。ん。少ツトを略リヤクバ。一イツ七シチ九ク
 のニ字ジハ。奉元ホウゲン乃ナリ訓クニ小コ。つ。此コノ字ジ無カ。依ヨて
 助字スベテのつ。乃ナリ字ジ。げ。り。呼コる。小コ。つ。の字ジ。一イツ
 ち。り。二ニ。三サン。四シ。五ゴ。六ロク。七シチ。八ハチ。九ク。

皮	肉	衆	筋	五充	一六	四九	五干	二七
辛	甘	苦	酸	五味	水	金	土	火
腥	香	焦	羶	五臭	壬癸	庚辛	戊巳	丙丁
苦	樂	喜	捨	五受	子	酉	辰	午
智	義	禮	仁	五常	黑	白	黃	赤
不盜	不妄	不媼	不殺	五戒	北	西	中	南
<small>第六意識</small>	<small>第九菴羅智</small>	<small>第七末那識</small>	<small>第八阿賴耶識</small>	九識	冬	秋	青	夏
<small>妙觀智</small>	<small>法界性</small>	<small>平等智</small>	<small>大圓鏡智</small>	五智	羽	商	宮	徵
風	地	火	空	五大	脣	腭	喉	齒
瓦	瓦	瓦	瓦	五季	啞	呵	啞	噓
彌陀	大日	寶星	阿闍	五佛	吟	哭	歌	語
菩提	方便	修行	發心	五轉	腎	肺	脾	心
背	方	三角	團	五形	<small>沈石而濡</small>	<small>浮瀟而短</small>	和緩	<small>浮大而散</small>
瓦	心	瓦	瓦	焉	耳	鼻	身	舌

三八	五數	五行	十干	十支	五色	五方	五時	五音	五處	五氣	五聲	五臟	五脈	五根
木	五	行	十	十	五	方	時	音	處	氣	聲	臟	脈	根
甲乙	甲乙	卯	青	東	春	角	牙	轉	喚	肝	腎	弦	長	眼

略ワッマシツ一々曰く
 糖テン一々五色五味亦乃ワッマシツの五法と成
 此陰陽奇偶合之辨ハシテウの五行ハシテウ木火
 水と生る。一壬六癸と氷なり二丁七酉
 ら火あり五甲八乙ハ木なり四辛九庚
 金あり五戊十巳と土あり。此五行展
 略ワッマシツ一々曰く

骨 髓 腐 憂 智 不 飲 水 不 釋 迦 涅 槃 圓 丈

此中不且く五色は果て相生を明さば。
 まの素問脈要精微論云く夫れ精明
 五とハ氣の毒之と。是五行乃氣。五
 色の法然然とあり。命ありて其出
 ら北は水の黒色より。水生木と東乃木
 の青色と生じ。此本より木生火と南の
 火は赤色を生じ。火より土生土と中
 の土乃黄色を生じ。此土より土生金と

西乃金の白色を生じ。此金より金生水
 中北の氷は黒色に化る。是草木乃花の
 五色あり。五行乃氣の某某の色を顯
 せし物なり。此五色相克し雜さば種々
 無量は色を生ず。然れども根本は
 は五色なり。五色乃中して又根本と
 謂ハ。北方の黒色なり。總して水ハ物乃
 始め終りたるを以て根本なり。母の位
 といふ宋の王達が曰く。草木乃花は五色

萬年州卷下

代跋

以多波惟和國字
隨寫懸膝畫音義
奎劉通照撰採功
即日帳閣為怪滑
辛巳之冬十月

大悲山雲書

いろは萬年州卷下畢

いろは
萬年州

